自由論題セッション報告申込用　要約フォーマット

氏名（Name）

林　倬史（Takabumi Hayashi）

所属・職（Affiliation）

立教大学（名誉教授）

報告タイトル（Title）

ラピダスの成功可能性　Part2：ダイナミックケイパビリティ論の視点から

キーワード（5 keywords）

1：ラピダス、2：Sensing, 3:Seizing, 4:Techno-business eco-system,
5： 成功可能性

要約（Abstract）

1. 研究目的（Objective）

汎用ロジックチップおよび AI チップの分野における日本半導体産業の復権は、ラピダス社の成功可能性にかかっているといえる。本報告では、同社の分析を以下の二点から試みることを目的としています。（1）スタートアップ企業としてのこのラピダス社の戦略と成功可能性をダイナミックケイパビリティ論の視点に留意しながら検討する。（2）同社の分析を通して、ダイナミックケイパビリティ論の留意すべき課題を提起する。

2. リサーチ・クエスチョン（Research question）

2027 年度までに 2nm 微細チップの量産を目指しているスタートアップ企業ラピダス社の戦略の動態を分析することによって、J.D.Teece のダイナミックケイパビリティ論の有効性と課題がどこあるのかを明らかにしていく。

3. 研究デザインと方法論（Research design/methodology）

ラピダス社の　法人化に向けた戦略経緯、および法人化後の戦略経緯を、資料及び訪問調査を通して各プロセスにおける戦略的課題と展開の推移を、ダイナミックケイパビリティ論の視点から同社の成功可能性を検討する。同時に、同社の戦略的展開プロセスの分析を通して、ダイナミックケイパビリティ論自体の有効性と課題を提起したい。

4. 発見事項(Findings)

ラピダスは、一般的な IT 時代における スタートアップ型企業とは異なり、次世代型微細チップのファウンドリーとしてのスタートアップ企業である。そのため、当初から数千億円から数兆円を要するスタートアップ企業であるため、従来型の Dynamic Capability 論では十分に説明しえない戦略的課題を抱えている。
したがって、その点を詳細に分析することによって IT 時代により適合的な Dynamic Capability 論を再検証しうる点を提起した点にある。

5. 理論的・経営管理上のインプリケーション(Theoretical/practical implications)

IT 時代における、AI チップを含む半導体産業におけるスタートアップ型ビジネスにおいては、Ordinary capability とは明らかに異質な、そして従来型 Dynamic Capability 論をさらに発展させたリーダシップ論を十分に入れ込んだ DC 論が必要となってることを提起している点にあると思います。

6. 限界(limitations)

ラピダス社は、2022年に法人設立されたが、事業の成否は2027年度における微細チップの短納期型の多品種少量生産システムの構築と受注に成功するかどうかにかかっている。そのため、同社の戦略は極めてダイナミックに推移しているために、戦略結果の成否を理論的に明確化することに限界性を有している。

7. 独自性と価値(Originality/value)

本報告の独自性は、すでに事業の成否が明確に論じられるケースにもとづくものではない。したがって、動態的に戦略が推移するプロセスを理論化する点に一定の独自性を見出している。同時に、同社の成否が明確ではない時点で理論化を試みる点に困難さと価値があるように思われる。